

機関番号：32663

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520652

研究課題名（和文）統治空間としての城の生成と機能をめぐる歴史考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeo-historical study on the formation and fonctions of the French medieval castle like a space for the domination

研究代表者

堀越 宏一（HORIKOSHI KOICHI）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：20255194

研究成果の概要（和文）：

10世紀末から北フランスで建設が始まった初期の石造城砦を調査・研究の対象として、その生成の過程と、城が有していた社会機能を多角的に明らかにした。

そこでは、古代ローマの建築様式の影響を受けて建てられた最初期の方形の天守塔が、城砦としての防衛機能を追求した結果、13世紀初頭までに、円筒形天守塔（「フィリップ式天守塔」）となり中世的頂点を迎えた。しかし、城の完成とその結果としての統治の安定の結果、円筒形天守塔に欠けていた居住性を求めて、統治のための公的空間である大広間と城主の居住空間は、城壁に内接する方形の館に移ることとなった。天守塔には、政治的象徴性だけが遺されることとなる。中世の城は、個々の城の軍事的機能と政治ないし統治機能の必要性に応じて、多様な形状を取るようになるのである。

研究成果の概要（英文）：

We studied the formation and the social functions of the first castles of stone constructed in the North of France since the end of the Xth century.

The quadrangular keep, that was created under the influence of the Roman architecture, becomes until the beginning of the XIIIth century the circular keep, said “la tour philippienne”, apogee des medievals castles, while pursuing the defensive efficiency. Yet as soon as one reaches to this perfection and to the stable domination as its result, the great hall as public space and the private rooms of the lord transfer in a quadrangular building leaned inside the surrounding wall of the castle, while looking for the habitability that lacks in the circular keep. The latter rests nevertheless like a symbol of the lord's political power. The medieval castle takes its various shape according to the necessities military, political and governmental of each case.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：中世フランス、考古学、城、天守塔、大広間、礼拝堂、住空間、フィリップ2世

1. 研究開始当初の背景

19世紀から20世紀前半まで、中世フランスの城砦に対しては、もっぱら建築史ないし軍事史の視角から関心が寄せられることが多く、中世城砦は、現在のような学術的な意味での歴史考古学研究の分析対象ではなかった。

しかし1950年代のG・デュビイのシャテルニー論に基づいて、城と城主支配領域を中世封建社会の基本的な支配単位とする考え方が広く受け入れられるようになると、中世城砦そのものに対する問題関心が高まり、1970年代から城を対象とする本格的な考古学研究が開始された。カーン大学のミシェル・ド・ブアールによるカーン城とドウエラ・フォンテーヌの王館の発掘はその先駆けであり、以後、フランス各地に現存する石造の城の考古学的分析が蓄積されていった。

Jean Mesqui, *Châteaux et enceintes de la France médiévale*, 2 vols, Paris, 1991-1993が、この分野を代表する総合的研究書だが、その後も、その著者であるジャン・メスキ自身によって、中世フランスについて、事実上現存最古の城であるロッシュ城天守塔の研究(1998年)が発表されるなど、現在に至るまでフランス各地で研究が継続している。

その一方で、建物としては現存していないものの、10世紀後半からフランスのみならずヨーロッパ全域で建設された木造の城(motte and bailey castle)の盛土部分や土塁の遺構の考古学研究も進められた。航空写真によって多くの遺構が発見されただけでなく、1980年前後からは、ナンシー大学のミシェル・ビュールによって、古文書史料と遺跡の考古学的分析との結合の必要が力説され、文献史学と考古学との学際的融合が目指されたことは、中世城砦研究のみならず、歴史学研究全般に対しても新しい研究モデルを提示するにいたった点で、画期的な展開となった。

ところが、1990年代以降、フランスでは考古学発掘の権限をめぐって、大学に所属する考古学者と開発に伴う緊急発掘を職業とする「発掘業者」との間に争いが起こり、2002年からは後者が発掘に関する権限をほぼ独占し、大学に所属する考古学者は発掘現場から締め出されることとなった。このため、フランスでは、今後しばらくの間は、大学に所属する中世考古学者による本格的な学術的発掘が、新たに行われる可能性はほとんどなくなり、発掘によって新しい学術情報がもたらされることが期待できなくなった。

このような状況下で、大学に所属する考古学者は、(1)発掘によらない、地上に現存する中世の建物の建築史的分析と、(2)半世紀来蓄

積されてきた個別研究のデータの総合的な再分析を進めることとなった。同時に、これまであまり注目されることのなかった、城の非軍事的要素、すなわち、城の統治空間や居住空間の分析が進み、これまで語られることのなかった「支配者の居館」としての中世城砦の姿が明らかになりつつあるのが、現在のフランスにおける研究状況である。

このような中世フランス考古学の研究動向とその成果に関しては、日本で紹介されることはこれまでほとんどなかったが、『西洋中世学入門』(高山博・池上俊一編、東京大学出版会、2005年)の「中世考古学」の章で、私自身が中世城砦研究の動向を紹介する機会があったほか、2005年から3年間にわたり、科研費基盤研究(C)「中世フランスの住空間の構造と機能に関する歴史考古学的研究」(研究代表者・堀越宏一)を行い、そこで多くの情報と発見を得ることが出来た。それらの研究を通じて、もっとも重要であると考えられたのが、中世社会における支配と統治の行為の拠点としての石造の城の存在であり、城の空間構造の機能と歴史の変遷をめぐる問題である。

現在の中世ヨーロッパの城砦研究の関心は、かつてのように軍事史的なものだけに限定されるものではなくなっている。むしろその中心的課題は、かつて中世ヨーロッパの石造の城が有していた、非軍事的なものも含めた多様な機能を総合的に明らかにすることに置かれるようになっていく。

2. 研究の目的

10世紀以降にフランスで建てられた城砦と館を研究対象として、軍事的施設と統治のための公的空間であると同時に、城主の私的住居でもあるという非軍事的な側面にも注目しつつ、中世フランスの城の機能とその形態の歴史を、実例と文献史料、図像史料に即して、学際的に明らかにすることを研究目標とした。

3. 研究の方法

基本的研究計画・方法としては、まず第一に、現在、フランスで現存ないし発掘されている中世城砦の現場と博物館などに保存されている発掘資料を実地に調査して、単なる情報収集だけでなく、刊行されている発掘報告書に記載された考古学情報の完全な理解を得る。

第二に、県古文書館に保管されている古文書や地図、地籍図などを調査して、文献史料・図像史料からの情報収集にも努める。こうして、発掘成果と文献・図像史料の二つの方向から、中世フランスの石造城砦の内部空

間の構造と機能、その歴史の変遷を解明する。この研究では、フランスにおける最新の研究成果の吸収が不可欠であるので、研究期間中、常にフランス人研究協力者との連携を図ることに留意した。

具体的には、これまで常時連絡を取り合ってきたナンシー大学中世考古学研究センター（ナンシー大学中世考古学担当教員であるジェラルド・ジュリアート教授、同中世考古学研究センター主任研究員であるシャルル・クレメル氏などがその中心的メンバー）を拠点として、各地の研究者と討議しながら情報収集を行い、各地に散在する発掘現場と古文書の調査を効率的に行うために必要不可欠な情報の収集に努めた。このほか、フランスに関しては、ミシェル・ピュール氏（ナンシー大学名誉教授であり、同中世考古学研究センターの創設者）を中心とする人的ネットワークに多大な協力を仰ぐことができた。

同時に、現在、ディジョン大学文学部の中世考古学担当助教授であり、ブルゴーニュ地方の中世城砦研究の第一人者であるエルヴェ・ムイユブーシュ氏と、中世城砦研究の現状とともに、フランス各地の考古学発掘現場の状況について意見交換・討議を行うことによって、現在の発掘現場の状況に関して詳細な情報と最新の研究成果を収集することが出来た。

さらに、現在でも中世城砦の発掘が続いている例外的な大学研究者である、ルーアン大学のアンヌ＝マリー・フランパール＝エリシェ名誉教授からも、彼女が主催する発掘現場（Château Ganne, Calvados）を中心とした、フランス中世城砦考古学の最新の情報を得ることが出来た。

これらのフランス人研究者以外にも、パリの国立高等学術研究院のジャン＝フランソワ・ベルオスト氏、同研究院の中世図像史料の専門家であるペリーヌ・マヌ氏、パリの国立民俗学博物館前館長ミシェル・コラルデル氏など、これまで交流を続けてきたフランスの考古学および歴史研究者からも多くの有益な情報を得ることが出来た。

4. 研究成果

これまでの中世城砦研究では、石造の城砦に関しては、より多数建設された木造の城（*motte and bailey castle*）が淘汰される過程で、一部の城が石造化されたことのみが強調され、城以外の石造建築物との建築史的な関連が明らかにされることはなかった。現在の時点での私の仮説では、アルプス以北の西ヨーロッパにおける石造建築の技術は、ローマ期に普及したのち、フランク時代にも残されていたごく一部のバシリカ様式の大規模公共建築物を通じて細々と継承されていった

と推定される。その一例は、ミシェル・ド・ブールによって発掘された前述のドゥエ・ラ・フォンテーヌの王館であろう。

この900年ごろにロベール家（＝カペー家）によって建てられた王館の分析と、現存する最古の石造の城であるロッシュ城（11世紀初頭建設）に関するジャン・メスキの研究を付け合わせると、その構造上ないし機能上の類似に気づかされる。すなわち、双方とも方形の建物であり、大広間、食物貯蔵庫と調理場、寝室という三要素から成っているのである。こうして、紀元千年前後の北フランスにおいて、石造の城の天守塔が出現した。

このような石造の城は、誕生当初から非軍事的な、統治のための空間や城主＝支配者の私的空間を含んでおり、そのような構造は木造の城（*motte and bailey castle*）でも変わることがなかった。後者が石造化される場合（例：ジゾール城）にも、そのような構造が新しい石造天守塔のなかに保たれるのである。その際、居住性を重視すると天守塔は方形になり、投擲物に対する防御性を重視すると多角形や円形になっていく。

このような天守塔 *donjon* とその付属施設の形態と内部機能の相互関係の歴史の変遷を、主要な築城者（アンジュー伯フルク3世ネッラとフランス国王フィリップ2世）の築城政策に即して解明することが、本研究の主要な内容となった。

このうち、研究第1年目（2008年度）と第2年目（2009年度）には、10世紀末から11世紀初めにかけて、中部フランス・ロワール地方に、アンジュー伯フルク3世ネッラによって建てられた、最も初期の石造城砦を調査・研究の対象とした。いずれも方形の天守塔を備えていて、フランク期の方形の館との連続性をよく示すと同時に、それが城に発展してゆく歴史的経過を知ることが出来る遺構である。

第1年目（2008年度）には、文献による調査の後、2008年8月にロッシュ城の現地調査を実施し、現地の管理担当者とのインタビュー調査によって、11世紀前半という建設年代確定の決め手となった足場の木材なども実物を見ることができた。

前述のように、このロッシュ城は、ローマ時代のバシリカ様式公共建築の伝統を受け継いだフランク期の方形の館が城に発展してゆく歴史的経過の、その最初の段階に位置する建物である点でまさに画期的な歴史的意義をもつ城であるが、それと同時に、その天守塔の内部を観察すると、公的統治のための空間としての大広間 *aula*（1階）、城主一家の住まいとしての居間＝寝室 *camera*（2階）、祈りのための礼拝堂 *capella* をその内部に含む空間構造を読み取ることが出来る。さらにそこに軍事的機能が加わって、中世フ

ランスの城砦を構成する多様な要素が天守塔において総合的に現れるわけで、その意味で、このロッシュ城は、11世紀前半という例外的に早い時期に建設された城でありながら、中世の城の機能全体をよく示している事例である。

第2年目(2009年度)には、アンジュー伯フルク3世ネッラの築城した城をより広範囲に捕捉するために、ロワール地方に南接する、ポワトゥー地方をフィールドとした。2009年9月に、同地方に散在する11~12世紀の城砦を実地調査し、主要な石造天守塔の遺跡を実見することが出来た。代表的な城は、ルーダンとニオール、ショーヴィニーの天守塔であり、いずれも方形天守塔の姿をよく残しているが、ニオール城では、方形天守塔の四隅が円筒形の小塔で防護されるとともに、天守塔そのものが二つ設けられて、並置・連結されるという形になっていて、城砦設計上の発展的工夫が観察された。

このような天守塔の発展の歴史において、その頂点に位置するのが、主にノルマンディー地方からセヌ川流域地域で、フランス国王フィリップ2世(位1180-1223年)の治世に建てられた一連の「フィリップ式天守塔 la tour philippienne」である。

初期の方形石造天守塔が、フランス国王フィリップ2世の治世に、より防御に優れた円筒形に形を変えていった過程に関しては、論文「中世フランスにおける石造の城の起源 王宮から天守塔へ」(千田嘉博・矢田俊文編『都市と城館の中世』高志書院、2010年、所収)において総括した。

1190年代に建設されたパリのルーヴル城を出発点とするこの「フィリップ式天守塔」群は、円筒形天守塔を城壁が取り囲む構成をとっている。円筒形の塔は、投石機から発射される石弾に対して、もっとも頑丈な壁面の形だったことを考えると、この形の天守塔が中世的天守塔の理想形的頂点に位置するものであったといえる。

同時に、天守塔を囲む城壁にも半円形の側防塔を規則的に配置することによって、城壁の強化が図られた。さらに、1180年頃からは、攻城軍を撃退する戦法として、この側防塔の側面に矢狭間を設けて、そこから、当時、普及し始めた弩の矢を城壁に取り付く敵兵の側面に向けて発射するという新しい戦法が現れるようになる。城壁の中に鎮座する天守塔が、防御一辺倒の消極的な施設だったのに対して、この側防塔からの弩の射撃や、さらには城壁上部の回廊に設けられた石落としからの攻撃は、城を防衛する側も、城を囲む敵に対して積極的な攻撃を行うことを可能にするものであり、攻城戦の姿を大きく変えるきっかけとなった。こうして、城の軍事的機能の中心は、完成されたばかりの円筒形天守

塔から、それを取り囲む城壁へと移ることとなった。

同時に、この円筒型天守塔は、居住性に欠けるという大きな欠点も持ち合わせていた。このため、フィリップ2世期に完成された円筒形天守塔の内部に設けることの難しかった大広間は、その後、天守塔を出て、城の囲壁=城壁に内接する形で建てられた方形の館の2階部分に置かれることが多くなる。フィリップ2世治世末期には、天守塔を持たずに、城壁に内接する館的な建物しか持たない城(Château de Yèvre-le-Châtel, Loiretなど)さえ現れるのである。こうして防御と居住性という二重の理由により、天守塔は実用性を欠いたものになる傾向があったが、その一方で、城主の権力を象徴する存在として、依然として建設され続けることとなった。

このように、中世ヨーロッパの石造城砦の変遷を観察すると、軍事技術的理由と同時に、城主の社会支配に関わる機能が同じ程度で重要であったことがわかる点が興味深い。最初期には、防衛上の配慮から円筒形だった城の建物が、封建王政の安定と共に、居住性や空間的広がり求めて、再び方形建物になっていくプロセスと天守塔の政治的象徴性はそのことをよく示している。

結局、中世の城とは、防衛拠点であると同時に統治のための公的行為の場でもあり、城における軍事的機能と統治機能との相関関係こそが、近世以降の城とは明瞭に異なる、中世の城の特徴であるといえよう。中世の城砦研究を、単なる軍事史に終わらせないためには、このような城の社会的機能の変遷を視野に入れて、問題を総合的に解明することが決定的に重要なのである。

第3年目(2010年度)には、ブルターニュ地方東部、ノルマンディー地方から北仏ピカルディー地方とパリ盆地にかけて散在する12~13世紀の大型城砦を主たる研究対象とした。これらの地域は、1200年前後の円筒形天守塔の完成期に引き続いて、中世城砦建築のもっとも先進的な地域だったからである。その際、城の及ぼす支配と統治行為のための公的空間である大広間 *aula*, *salle* とその周辺施設(入り口階段など)を考察の中心とした。

天守塔の外に置かれた大広間の最良の事例は、フィリップ2世の有力家臣でもあったクーシー領主アンゲラン3世 Enguerrand III, sire de Coucy (1180年頃-1243年)によって建設されたクーシー城(ピカルディー地方)である。この城の城壁内部には、「勇者の大広間 *la salle des Preux*」という812²に及ぶ巨大な大広間の壁面のほか、かつてはこの大広間に上る大階段 *le grand degré* の下に置かれていたペロン *le perron* と呼ばれる石造テーブルが残されている。ペロンと大

階段は、城主の公的権力を象徴する舞台装置であり、大広間と一体となって、家臣や領民に対して高いところから君臨する権力の形を表象していた。加えて、クーシー城は、西欧最大の天守塔を備えていたものであり、そこには天守塔が象徴する政治支配の形も見て取ることが出来る。

2 階に位置する大広間やそこに上がる大階段下に置かれたペロンなどの建築要素は、大広間が、城ではなく館や王宮に配置される場合に、それが一階部分に置かれることの多かったイングランドやドイツの城や王宮の構造と対比すると、中世フランスの城の重要な特徴となっている。特にドイツでは、フランスと比べて城砦建設が遅れる一方で、カロリング期以来のバシリカ式王宮建築の伝統が各地に残り続けた。天守塔と大広間の形状のこのような相違は、おそらく、封建王政と封建領主の関係の相違とも表裏一体となったものである。研究最終年度の研究課題を追求する過程では、城の建築をこのような文化史的観点から捉えることの可能性を見出すことが出来た。

このような 13 世紀までの石造の城についての考古学的知見の収穫と比較して、文書史料の調査はあまり大きな成果を挙げることが出来なかった。城を地域史のなかで考察し、理解するためには、各対象地域に関する膨大な情報が必要不可欠であり、それを獲得する時間的な余裕が十分にはなかったためである。

そのような状況のなかで、大きな収穫であったのは、軍事ないし統治、城主の住居、礼拝室などに関わる、城の多角的機能の史料として、写本挿絵 miniatures に注目する、ペリーヌ・マヌ教授（フランス・歴史研究センター-CNRS）の論文「城にいる領主を描いた中世の図像」（小島道裕編『武士と騎士』思文閣出版、2010 年、所収）を翻訳出版したことである。

多くの写本挿絵の写真とともに、この論文で論じられている、城の大広間にいたる階段、大広間の調度品、大広間で開催された宴会とそこでの娯楽、私的空間としての寝室と中庭をめぐる内容は、それらの設備を使用し、城での催しに参加することが、貴族身分を表現するものとしてコード化され、中世ヨーロッパ貴族の社会的威信を表現するものとなっていたことをよく示している。

中世ヨーロッパの城が有していた社会的機能の解明という将来的な課題に関しては、ここで挙げてきた論点を深めることが肝要であろう。そして、写本挿絵と考古学的遺構を同時に研究対象とすることにより、多くの具体例に基づいて、より一層具体的にこの問題を考察して、初めてその解答を得ることが

出来るように考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

堀越宏一「中世クリュニーの町家の装飾窓 (claire voie)」『東洋大学文学部紀要・史学科篇』査読無、第 63 集・第 35 号、2010 年、231～254 頁。

HORIKOSHI, Koichi, 'L'origine juridique du moulin banal : le droit de cours d'eau', dans éd. P. Corbet et J. Lusse, *Ex animo. Mélanges d'histoire médiévale offerts à Michel Bur*, Langres, Editions Dominique Guéniot, 2009, pp.425-436. 査読無

〔学会発表〕(計 3 件)

堀越宏一「中世ヨーロッパの写本挿絵における時代表現と写実性」、早稲田大学ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所、第 1 回シンポジウム「中世の時間意識」、2010 年 9 月 25 日、早稲田大学戸山キャンパス。

堀越宏一「中近世フランスの三部会における課税合意の形成」、法制史学会、2009 年 4 月 18 日、九州大学。

堀越宏一「中世後期フランス三部会での課税をめぐる合意形成」、REN 研究会、2008 年 11 月 15 日、青山学院大学文学部。

〔図書〕(計 7 件)

堀越宏一「中世後期フランスの三部会における課税合意の形成と課税放棄」渡辺節夫編『ヨーロッパ中世社会における統合と調整』創文社、2011 年、130～158 頁。

堀越宏一「中世ヨーロッパにおける騎士と弓矢」小島道裕編『武士と騎士 日欧比較中近世史の研究』思文閣出版、2010 年、55～88 頁。

（翻訳・堀越宏一）エチエンヌ・ユベール「中世西欧地中海沿岸地方の農村部における城と定住」、小島道裕編『武士と騎士 日欧比較中近世史の研究』思文閣出版、2010 年、186～200 頁。

（翻訳・堀越宏一）ペリーヌ・マヌ「城における領主を描いた中世の図像」小島道裕編『武士と騎士 日欧比較中近世史の研究』思文閣出版、2010 年、247～272 頁。

堀越宏一「中世フランスにおける石造の城の起源 王宮から天守塔へ」千田嘉博・矢田俊文編『都市と城館の中世』高志書院、2010 年、131～160 頁。

堀越宏一『ものと技術の弁証法（「ヨーロッパの中世」第 5 巻）』岩波書店、2009 年、全 318 頁。

堀越宏一『ヨーロッパの歴史と文化』(共著)財団法人放送大学教育振興会、2009年。第2回「古代から中世へ」第3回「封建社会の形成とヨーロッパ世界の拡大」第4回「中世ヨーロッパの農村」, 21~61頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀越 宏一 (HORIKOSHI KOICHI)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：20255194

(2) 研究分担者 (0)

(3) 連携研究者 (0)